

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2012年度 第 2 回 全統マーク模試問題

国 語 (200点 80分)

2012年 8 月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。

① 受験番号欄

受験票が発行されている場合のみ、必ず受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄、高校名欄、クラス・出席番号欄

氏名・フリガナ、高校名・フリガナ及びクラス・出席番号を記入しなさい。

- 2 この問題冊子は、44ページあります。なお、問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾

国

語

(
解答
番号
)

1

}

36

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

現代アメリカのネイチャーライター、ロバート・フィンチのエッセイに「鯨(くじら)のように」と題する作品がある。ある日、作家が棲すみ暮らすケープコッドの海岸に鯨しがいの死骸が打ち上げられた。海岸ならばよくある出来事だ。その日、海岸は人で溢あふれかえった。だれもかれもが打ち上げられた鯨を「目撃」しようと駆けつけた。

そんないつときの熱狂が冷めたあとの海岸にたたずみ、作家はあの大騒ぎはいつだったのかと考え込む。人はなぜ海岸に打ち上げられた鯨の死骸にサツ(ア)トウトウしたのか。答はついに見つからない。さまざまな答が想定され、しかしどの答も不充分だと作家は考える。読みながら私たち自身もまた自分なりの解答を試みるかも知れない。「好奇心」と言ってしまうえば簡単だが、根源的な問いというものがつねにそうであるように、問題はむしろ、なぜ人の心のなかにそのような好奇心が胚胎(はいたい)するのかだ。フィンチはやつと次のような答に到達する。

その答えはあまりに明白で、もう僕たちには答えとも思われなくなってしまった。僕は、人はこの宇宙で他者との出会いを渴望していると思う。それを自然と呼ぶにせよ、荒野、「素晴らしきアウトドア」、あるいは、どんな呼び方をするにせよ。僕たちは、わくわくしながら、焦燥に駆られながら、人間とは別の生き物が僕たちを見つめ返してはくれないものかと探しているのだ。

「他者との出会い」、「人間とは別の生き物」に見つめ返されたい「渴望」が人にはあるのだという。それが鯨の死骸に群がった人間たちがその行動によって表現しようとしたことなのだと著者は語る。鯨を指して、「究極の不可知の他者」と言い換えてさえる。「究極の不可知の他者」に見つめられたい願望。

自然をめぐるこのささやかなエッセイが伝えようとするのは、美術批評家ジョン・バージャーが「なぜ、動物を観るのか」と

いうエッセイで問うたものと ^A同質だ。動物を「(文化的に) 周縁化」してやまない近代は、動物園を初めとして、「本物の動物に似た玩具、動物図像のコウ^(イ)ハン^(イ)な商業的拡大」を推し進めたにもかかわらず、それは同時に「動物が日常生活から撤退し始めた時期」に相当するのだと指摘している。

動物の周縁化の最終結果がここにある。人間社会の発達に決定的役割を果たし、一世紀弱前まで、常にすべての人間が共に生きた、動物と人間との間に交わされた視線が失われつつある。動物を観ている来園者、視線を相手から返されることのない人間は孤独である。人間は最終的に群れとして孤立してゆく種なのだろう。

「視線を相手から返されることのない人間は孤独である」、しかるがゆえにヒトという生物種は「人間とは別の生き物が見つめ返してはくれないものか」と相手を探し回るのだ。「動物と人間との間に交わされた視線」が失われつつあることを知るがゆえに、あるいは「人間社会の発達に決定的役割を果たした」動物という存在の周縁化になにがしかの危機感を覚えるがゆえに、ヒトは海岸に打ち上げられた鯨に向かって息せき切って駆けてゆく。フィンチは言う——「僕たちの肉体にとって食物と暖かさが必要なように、こうした意味での他者が、僕たちが人間であるためには不可欠である」

「わくわくしながら、焦燥に駆られながら、人間とは別の生き物が見つめ返してはくれないものかと探している」——このような欲望を自然とのコミュニケーションへの欲望と言い換えてもよい。これは ^(注2)デュープエコロジー以降の「環境倫理」の問題と無縁であるどころか、そこに直結する根本的な議論に ^(注3)ティショクする問題である。

たとえば、クリストファー・マニスの論考「自然と沈黙」によれば、「話す主体としての地位」を「人間のみの特権」として徹底的に分離した西欧近代の歴史的推移は、その ^(注3)ロゴス中心主義とヒューマニズム（人間中心主義）によって、「ざわめき、吠 ^(注4)えたて、沸 ^(注4)き立つ生物圏」、すなわち本来ならば「ヒトとコミュニケーションできる、話す主体に満ちた自然」(ミルチャ・エリアーデ)を「語られざるものの世界」へと放逐した。その結果、ヒトは「不合理な沈黙の世界でただひとり独白をおこなう」特異な

存在となり、沈黙の圏域に排除された自然は、「声も主体も奪われ」、つまりは〈客体〉として定位されることとなる。みずからの論考の目的を指してマニスは次のように書いている。

その結果、われわれは、現代の思想制度のなかで、自然の沈黙に向き合うことが可能な環境倫理を必要としている。なぜなら、饒舌な人間主体を取り巻く、この広く不気味な沈黙のなかでこそ、自然に対する搾取の倫理が具体化し、繁栄してきたからであり、それが目下、環境のための対抗倫理の模索を必要とするエコロジーの危機を作り出しているからである。

ジョン・バージャーのいう自然の「周縁化」の問題をディープエコロジーの思想的課題として受けとめようとするならば、**B**「饒舌な」話す主体としての人間という「虚構」のもとで強力に再編されてしまった人間と自然の関係を「再構築」する作業へと向かわねばならない。

ブルガリア生まれの記号学者ツヴェタン・トドロフの『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』は、この問題に関するさらに大きく深刻な危機を提示している。この本は、アメリカ大陸の征服をめぐるコロンブスを初めとする主だったヨーロッパ人たちが、とくに激烈な戦争を仕掛けていったスペインのコンキスタドルが、〈他者〉たるインディオたちにどのような機略、政略で臨み、どのような対他関係を演じたか、またラス・カサスのような「良心的」ヨーロッパ人たちがいかにして、〈他者〉との「ソウグウ」を介して「平等のなかで差異を生きる」という命題を認識・提起していったかを、歴史文書の博搜と記号論的読み込みを通じてあきらかにする「事例史」の試みである。

コロンブス以降のアメリカ大陸で生じた事態とは何か。トドロフはそれを **C**「ふたつのコミュニケーション形式の差異がもたらしたものとして整理してみせる。近代を通過しつつあったスペイン人たちは「人間とのコミュニケーション」という個人レベルのコミュニケーション形式を採りつつ認識・行動・発言するのに対して、インディオはつねに「世界とのコミュニケーション」⁽¹⁾、すなわち彼らの宇宙観の内部で起こる出来事としてそのコミュニケーション行動を展開する。トドロフは前者を「恣意性

の世界」、後者を「必然性の世界」と呼ぶ。「恣意性の世界」では事象はほとんど一回性の即応的な解釈対象となるが、「必然性」の世界では絶えずその宇宙観、世界観（神話・予兆形式など）の内部の問題としてその解釈体系全体（いいかえれば歴史全体）を編制し直さなければならない。したがって、モクテスマの事例としてトドロフが詳述しているように、インディオ側は目の前に現れたスペイン人たちをかならずしも「他者」として定位せず、むしろその世界観内部の象徴的事象として定位しようとする。モクテスマの即応性、即時性を欠く決定や判断はそのような記号論的、象徴的思考の所産なのだ。

「数百人の部下を率いていたコルテスが、数十万の兵士を^(タ)ヨウするモクテスマの王国をまんまと占領してしまったという謎」の答をトドロフはここに見いだす。しかし、トドロフは問う。スペイン人はたしかに戦争に勝利した。「だが彼らは本当に勝ったのだろうか」と。なぜなら、この勝利と同時にヨーロッパ人は、「世界と一体化する自らの能力」「世界との調和を感じ取る能力」つまり「世界とのコミュニケーション」能力を叩きつぶし、「一切のコミュニケーションは人間の間のコミュニケーションであるという幻想」を作り出してしまったからである。トドロフは言う。「人間は人間とのコミュニケーションだけでなく世界とのコミュニケーションを必要としている」と。その意味でヨーロッパの「勝利はすでに敗北に満ちていたのだ」と。

ヒトはコミュニケーションのふたつの形式のうち、片方だけを近代的理性の発明とともに異様に肥大させ、他方を徹底的に抑圧してきたのだ。そのような見方が、私たちの「コミュニケーション」概念の偏倚^{へんい}として影を落としている。それがどれほどさまざまな偏向であるかは、たとえばクロード・レヴィ・ストロースの『野生の思考』一卷を^{ひもと}繙くだけでも一目瞭然^{りようぜん}であろう。

あるいは生態心理学におけるアフォーダンス理論が、いわば「主体」なるものの「客体」性に注目しているのも、**D** 世界と自然

からその声と主体を奪い去った近代社会の「敗北」の様相を重く受けとめている証左にほかならないだろう。ネイチャーライティングや環境文学がやはり同様の問題をめぐっていることは、ロバート・フィッチの例から充分うかがえるのではないだろうか。私たちが世界／自然とのコミュニケーションの回復という命題を重く受けとめないとすれば、それはほぼ世界の半分を失ったままでいるということである。「環境コミュニケーション」というコンセプトは、たんに環境問題におけるコミュニケーション・プロセスの研究にとどまるものではない。また、自然に接触しそれを理解する過程とその理解をコミュニケーションする過程に

かわる「環境教育」も、たんに理科教育や自然教育といった狭義のペダゴジーから解放されなければならない。その解放の契機がトドロフの「世界とのコミュニケーション」をめぐる問題設定を視野に入れた「環境コミュニケーション」という新しい視点である。この視点の導入によって、「環境教育」の領野はよりラディカルな役割を果たすことになるであろうし、「環境問題」そのものもより包括的にとらえる必要が理解されるだろう。

(野田研一^{のだけんいち}「世界／自然とのコミュニケーションをめぐる」による)

(注)

- 1 ネイチャーライター——自然環境をめぐる文学作品を書く作家。後述されるクリストファー・マニスもその一人。
- 2 デイープエコロジー——一九七〇年代に提唱された、環境保護についての概念。すべての生命存在には人間と同等の価値があり、それゆえに人間が生命の固有価値を侵害することは許されないとする考え方にもとづく。
- 3 ロゴス——言葉。論理。
- 4 ミルチャ・エリアーデ——ルーマニア出身の宗教学者、小説家（一九〇七―一九八六）。
- 5 コンキスタドール——スペイン語で征服者の意味。一五―一七世紀にかけて、南北アメリカ大陸やカリブ海で先住民と土地を征服し支配したヨーロッパの人々のこと。コルテスやピサロがその代表。
- 6 ラス・カサス——カトリックの司祭（二四八四―一五六六）。スペイン人でありながら、スペインが同時代の南米で先住民（インディオ）に対して残虐行為を行ったことを告発した。
- 7 モクテスマ——アステカ王国（一五―一六世紀に現在のメキシコで栄えた）の君主。
- 8 クロード・レヴィ・ストロース——フランスの人類学者、思想家（一九〇八―二〇〇九）。
- 9 アフォードダンス——アメリカの心理学者ギブソンが提唱した概念で、環境が生物に対して与える意味や、生物と環境とのあいだに存在する行為についての関係性などのこと。
- 10 ペダゴジー——教育学。狭義には年少者のための教育のこと。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(オ) ヨウする

5

⑤ シャヨウを迎えた産業
④ 時代のヨウセイに應える
③ ボンヨウな人間
② 弱者の権利をヨウゴする
① ヨウシキ美を追求する

(ウ) テイシヨク

3

⑤ 景気のテイタイが続く
④ テイサイを整える
③ 宿屋のテイシュ
② 強いテイコウにあう
① 苦言をテイする

(ア) サツトウ

1

⑤ シュウトウな準備をする
④ 団員をトウソツする
③ トウトツな感じをもつ
② トウカクを現す
① 代表にトウセンする

(エ) ソウグウ

4

⑤ 本国にソウカンされる
④ 雪山でソウナンする
③ 過去をカイソウする
② ユウソウな舞踏を見る
① ケツソウを変える

(イ) コウハン

2

⑤ 手続きがハンザツだ
④ モハンを示す
③ ナマハンカな理解
② 二律ハイハン
① ハンゼンとしない

問2

傍線部A「同質だ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 海岸に打ち上げられた鯨に人々が群がった理由を探ることは、近代の人々が動物園などに赴き、そこにいる動物に見つめ返されることを求めることの理由を探るのと、同じ性質をもつ行為であるということ。
- ② フィンチのエッセイに示された鯨のエピソードと、バージャーのエッセイに示された動物園のエピソードは、共に人間と動物のあいだの日常的なコミュニケーションの様相を示すものであるということ。
- ③ もっぱら好奇心から鯨の死骸を見に来たように見える人々のあいだにも、動物を檻おりの中に押し込め、社会から排除しようとする近代の人間中心主義に対する不安と批判の共有が確認されるということ。
- ④ 動物園などで動物を見ようとする人々のあり方は、鯨の死骸を見るために多くの人々が集まるといふ現象が示している、自らとは異なる存在としての動物との交感を希求するあり方と通じているということ。
- ⑤ 人々が人間とは別の生き物から「見つめ返される」体験を求めるのは、人間が本来もっているコミュニケーションへの欲望の現れであり、他者を周縁化してやまない近代の孤独な個人のあり方を示しているということ。

問3

傍線部B「『饒舌な』話す主体としての人間という『虚構』のもとで強力に再編されてしまった人間と自然の関係」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 人間と自然の関係を、本来的にコミュニケーション能力をもつ人間の合理性と、その能力を人間によって奪われた自然の不合理性という、抽象的な関連においてとらえてしまうということ。
- ② 人間と自然の関係を、孤独のなかでかろうじて主体性を保持している人間と、現実コミュニケーションし合っているにもかかわらず客体性を運命づけられた自然との、対比においてとらえてしまうということ。
- ③ 人間と自然の関係を、世界の主体でありながら自然との対話を忘れて沈黙する人間と、客体でありながら沈黙を忘れて自然という構図によって把握してしまうということ。
- ④ 人間と自然の関係を、ひたすら話すだけの自然と沈黙するほかない人間という事実を裏切って、沈黙する自然と話すことを中心とする人間というフィクションとして編成してしまうということ。
- ⑤ 人間と自然の関係を、語り話すことができる唯一の存在としての人間と、ひたすら沈黙し人間によって表現されるだけの対象たる自然という図式で、固定的に理解してしまうということ。

問4

傍線部C「ふたつのコミュニケーション形式の差異」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 個々の人間のあいだでそのつど営まれる即時的なコミュニケーションと、全体としての世界との調和を感じ取るために時間をかけて進められるコミュニケーションという違い。
- ② 知謀、知略をめぐらせて勝利することを目指す戦闘的なコミュニケーションと、互いが対等な立場にある他者同士だという理解のもとで営まれる平和的なコミュニケーションという違い。
- ③ 認識、行動、発言を特定の宇宙観にもとづく恣意的なものとなす即応性に富んだコミュニケーションと、それらを宇宙内部の必然とみなす即応性を欠いたコミュニケーションという違い。
- ④ 恣意性にもとづいて世界や宇宙を改変していくことを目指すコミュニケーションと、世界や宇宙を必然的なものと見なしてその安定を目指そうとするコミュニケーションという違い。
- ⑤ 近代理性にもとづいて行われる自己とのコミュニケーションと、宇宙を自然的世界とする見方にもとづき自然と人間とのあいだで行われる神話的コミュニケーションという違い。

問5 傍線部D「世界と自然からその声と主体を奪い去った近代社会の『敗北』の様相」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 世界を人間とコミュニケーションしうる存在とはみなさず、あくまで近代理性の作用を受ける対象とみなしてきたことによって、植民地支配だけでなく動物の保護や自然の回復においても失敗するという逆説的な事態を招いたということ。
- ② 近代の人間は人間同士のコミュニケーションだけを追求してきた結果、世界とのコミュニケーションが調和や一体化をもたらしてきたことを見失ってしまい、環境問題において重大な失敗を経験しているということ。
- ③ 近代理性によって、世界や自然とのコミュニケーションの可能性を自ら封じてしまったことが、人間の孤立の原因であり、それが他者としての世界や自然とのコミュニケーションの回復を渴望せざるをえない事態を招いているということ。
- ④ 環境破壊の進行によって、近代の人間はコミュニケーションのための能力を喪失することになったが、その結果、動物や自然を周縁に追いやりつつかえってそれらを希求するという逆説的状况に置かれるようになったということ。
- ⑤ 近代の人間が世界や自然と対話する時間を失い、コミュニケーションというものを人間相互のものとして狭く理解してきたことが、環境教育を保守的なものにし、環境問題の理解をも部分的なものに押し止めてきたということ。

問6

この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① まず、鯨の死骸に群がる人々の感性と動物園に赴く人々のそれとの類似性について観察の結果を報告し、つぎに、話す主体としての人間と、沈黙する動物や自然とを対比させて、人間と自然の関係の修復という課題を提示する。そして、近代では世界が半分に狭まっていると警鐘を鳴らし、より広く世界や自然を求めていくことの重要性を示唆している。
- ② まず、フィンチとバージャーが浮き彫りにしている現代社会の問題を、動物と人間の関係の希薄さとして示し、つぎにマニスの議論を援用して、それが人間と自然とのコミュニケーションの問題であると解説する。そして、同じ問題が環境問題と関連する深刻なものだということを説いたトドロフの説を紹介しながら、対策の必要性を訴えている。
- ③ まず、諸家の言によりながら、異質な存在との交流を渴望せざるをえないほどに孤立した近代人の病理を明らかにし、つぎに、この病理をコミュニケーションに関わる問題としてより広い視野からとらえ直し、近代理性の抱え込んだ矛盾として解き明かす。そして、これ以上の近代化に歯止めをかけることが現代社会の再生に繋がることを検証している。
- ④ まず、文化的に周縁化された動物が人間にとっての他者として求められていることを指摘し、つぎに、この願望がコミュニケーションに関する近代人の自己中心的態度に由来すると分析する。そして、そうした態度とは異なるあり方との比較考察を通じて、コミュニケーション概念の再編成が環境問題へのアプローチに有効だと結論づけている。
- ⑤ まず、ネイチャーライターと美術評論家の見解を紹介するという実証的なスタイルによって、人間と自然とのコミュニケーションの必要性を論じ、つぎに、それとは対照的な意見を紹介することで、議論に説得力を加える。そして、歴史書を提示しながら話題を現実論へと展開し、より包括的な環境とのコミュニケーションの可能性を模索している。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第2問 次の文章は、一九五五年（昭和三〇年）に発表された小山清の小説「犬の生活」の一節である。これを読んで、後の問

い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

A 私はその犬を飼おうと思ったが、けれども、自分は軽はずみなことをしているのではないかという気もした。けれどもまた考えてみるに、私の過去は軽はずみの連続のようなもので、もはやそのことでは私は自分自身を深く咎めだてする気にもなれないのである。私はやはりいつもの伝でやることにした。私は犬の顔を眺めながら、「私さえ保護者らしい気持を失わないならば、お互いがお互いを重荷に感ずるようなことはまずないだろう。」と思った。自信のあるような、ないような気持であった。私は5 これまで男の友達とは幾度か一緒に暮らしたことがあるが、いつも気まずい羽目になってしまったのである。

私が借りている離れには土間がある。犬を飼おうと思ったとき、その土間のことが私の念頭に浮かんだ。犬は土間に這入ると、喉が乾いていたのだろう、そこにあったバケツの中の水をぴしゃぴしゃ音をさせてさもうまそうに呑んだ。私が上框に腰を下ろして口笛を鳴らすと、犬は私の足許に寄ってきて、いかにも満足そうに「ワンワン。」と二声吠えた。その様子は、「私達はどう他人じゃありませんね。」と云っているように見えた。そのときになって私は、犬を飼うには、私の一存だけではすまないこと10 とに気がついた。母屋の年寄の思惑が気になったのである。

私は犬をつれて、お婆さんのいる座敷の縁さきへ行った。お婆さんは長火鉢のわきに坐って小さなお膳に向い、独りで花骨牌を並べていたが、こちらに気づくと、

「おや、どの犬ですか。」

「迷い犬らしい。」私は弁解するように云った。「公園から僕についてきたんです。」

15 お婆さんは立って縁さきに来た。

「捨犬でしょう。」お婆さんは一寸調べるように見ていたが、「牝ですな。」

そう云われて、私は自分の迂闊さにはじめて気がついた。私は自分で飼う気でいながら、その犬が牝であるか、牝であるかを

まず確めることさえ忘れていたのである。私は軽はずみの例に洩れず、少しくとりのぼせていたのである。お婆さんの一言は、犬の姿態に感ぜられる、牝らしい優しさを私に気づかせた。

20 犬は沓脱石のわきにうずくまって、こちらの機嫌を窺うように薄眼をあげたりしている。

お婆さんが犬に対してあまり冷淡な素振りも見せないの、私は少しほっとした。お婆さんはなお見しらべるような眼つきをしていたが、ふいに声をあげた。

「こりゃあ、仔もちだ。この犬は仔もちですよ。」

「え？」

25 「どうも妊娠しているようですよ。お乳の工合からなにから。」

「へえ、それはまた。」

「仔どもが出来たので、飼主が捨てたのでしょう。たいした犬じゃないしね。」

私は少しく興ざめた。かりそめの出来心からとんだ厄介ものをしよい込んだような気がした。お婆さんは犬の額に掌をのせて、無言のまま、やさしく撫でた。たいした犬ではないと云っておきながら、不憫がついているその様子に、私は心を惹かれた。お婆さんの態度には、娘を労っている母親のようなやさしさが感ぜられた。犬は眼を細くして、お婆さんの愛撫に応えている。そのほっとしているような様子を見ると、私もまた心をそそられた。

「犬は好きですか。」

とお婆さんが私に向って云った。私は一寸返答に困った。

「嫌いじゃありません。まだ一度も犬を飼ったことはないんです。」

35 「可愛いもんですよ。亡くなった連合が犬や小鳥の好きなたちでしてね。何度か飼ったことがございますよ。」

お婆さんの声音には、亡くなった人を懐しんでいる響があった。私は云い出す折を得たような気がして、

「どんなもんでしょうか。出来れば飼ってやりたいと思っているんですが。」

「そうですね。」お婆さんは自分の胸に問うように、「せめてお産がすむまでもね。なに、それほど世話も焼けませんよ。」

B 私はほっとした。このように容易くお婆さんの許諾が得られようとは私は思っていなかった。

40 「この犬は二歳位でしょう。初産でしょうよ。」

とお婆さんは云った。その初産という言葉が私の心にしみた。

私は犬をメリーという名で呼ぶことにした、メリーは、お婆さんの云うように、たいした犬ではない。ありふれた雑種である。軀つきは様子のいい方ではないが、さりとて不恰好というわけでもない。器量だつてまんざらでもない。よく見ると、可愛い顔をしてゐる。なによりも、高慢らしい感じがしないのがいい。眼がいいのだ。メリーの眼は、ほんとにいい。眼は心の窓というが、メリーの眼を覗くと、メリーが善良な庶民の心を持っている犬だということが、よくわかる。そして、こういう動物達の方が、人間よりも、神様のそば近くに暮らしているということが、よくわかる。私が「メリー。」と呼ぶとメリーはすぐ私の正面にきて、私の顔を仰ぎ、尾を振りながら、「ワン、ワン。」と吠える。その様子は、「私はあなたが、私を呼んでいるのだということをよく知っています。」と云っているようにも見え、また、「なんの御用ですか。」と云っているようにも見える。ふとして私が、メリーは前の飼主のことを思い出しているのではなからうかと僻んだことを考えたりしていると、メリーは私の気持を察したかのように私に戯れかかり、自分はいまの瞬間を楽しむことではいっばいで、他意はないのだというようなしなをして、私の気まづさを救ってくれる。私はこれまで誰からも、こんなふうに媚びられたことはなかった。メリーは前の飼主のもとでは、なんとという名で呼ばれていたかは知らないが、いまはもう全く、私のメリー以外のものではない。前の飼主にしてからが、あるいはメリーを捨てたのだとしても、決して薄情な人ではなかったに違いない。やむにやまれぬ事情があつたのであろう。その一家には、とくにメリーと仲良しの坊やがいたかも知れない。

C メリーを見ていると、そんな想像が湧いてくるのだ。

こないだ私は手帳にこんなことを書きつけたばかりだったのだが。

「……私のもとには殆ど訪問客はない。私もまた人をたずねない。私は生れつき引つ込み思案な性分なので、独りでいる方が勝手なのである。たまに人とお喋りをする、こなれの悪い食物を食った後のように、しばらくは気色が悪い。『退屈して困る』60 ということをよく聞くが、私の日常などは凡そ退屈なものであるが、けれども私はそれだからといって、べつに困りはしない。

私は誰と共にいるよりも、^(イ)無聊を託^{かこ}っている方がいい。思うに、徒然^{つれづれ}というものも、幸福感の一種なのかも知れない。」

ところで、メリーと共に暮らすようになってから、私の日常も多少あらたまってきた。私は無聊を託^{かこ}つてばかりもいられなくなった。まず私はこれまでのように朝寝坊が出来なくなった。メリーのために朝飯の支度^{しど}をしなければならぬので。私は自分の軀^{からだ}が寢床から、こんなにも思い切りよく離れられるものとは、思っていなかった。また早起の味がこんなにも爽快なものと65 は知らなかった。^(注3)焔^{こん}焔^ろに火をおこし、メリーと自分のために野菜を煮るのだが、私の心はまるで幼妻のそのようにいそいそしているのだ。お婆さんは「世話焼けない。」と云ったけれど、それは全くそうなのだ。メリーのために何かをしてやるということは、私にとっては少しも厄介ではなかったから。メリーのために手足を働かすたびに、私は自分の心が活発^(ウ)と鷹揚^{おうよう}の度合を増していくような気がした。

私ははじめ土間の隅に藁^{わら}を敷いて、そこにメリーを寝かしたが、その後小屋をつくった。それはいわば大野暮とでも云うべき70 代物であった。もともと私は手工は幼稚園時代から苦手だったのだ。私は小屋を離れの戸口の前の柿の木の下に置いた。私は慣れぬ仕事で掌にできた肉刺^{まめ}をなでながら、自分にもなにかがつくれるという喜びをかすかに感じた。それは遠いところからきた暗示のように、かすかに私に囁^{ささや}きかけた。なにかがつくれる。愛することだって、出来ない限りでもない。

私はメリーを獣医の許^{もと}に連れて行^もった。私はメリーには出来るだけのことをしてやりたいと思った。

獣医は柔和な顔をした青年紳士であった。

75 「どうなさいました。」

「いいえ。健康診断をお願いしたいのです。」

獣医は台の上にメリーをお坐^{すわ}りさせて、物慣れた手つきで、聴診器をメリーの軀^{からだ}にあてた。その間、メリーは全く従順にして

いた。

「妊娠をしていますね。」

80 「はい。どんな工合でしょうか。」

獣医は黙ったまま、こんどはメリーの後肢の内股またのあたりを握って、懐中時計のおもてを見つめ、メリーの脈搏みやくはくを数えた。私はメリーの顔と獣医の顔とを交互に見ながら、胸が熱くなった。神様は依怙えこひ鼻眞ひまきなしに人間の一人一人に、その素質にふさわしい使命を授けてくれるのだという気がしたのである。

「異状はないようです。お産までには一月ありますね。」

85 私はメリーに代って、獣医から妊娠中の心得を聞いた。朝夕に適度な運動をさせてやるほかは、なるべく繋つないでおくこと。よその犬と喧嘩けんかをさせないようにすること。流産をする心配があるから。人間と同じように母犬もおなかがよく動くものだから、滋養食をふだんよりは余計にやるようにすること。そのほか色々聞いた。

獣医はメリーが捨犬でこないだ私に拾われたばかりだと聞くと、念のため狂犬病の予防注射をして置こう、飼犬の登録申請をする場合にも、その証明書が必要でもあるからと云った。

90 「予防注射などをして、大丈夫でしょうか。」

と私は訊きいた。獣医はわからぬような表情をした。

「おなかの仔どもにさしつかえはないでしょうか。」

獣医はいい眼つきで私を眺め、破顔一笑した。

「心配はありません。」

95 獣医はまた助手に手伝わせて、メリーの頸けいに注射をした。メリーは注射針を刺された瞬間、「キャン。」と一声悲鳴をあげたが、あとは薬液を注入しおわるまでじっとしていた。獣医は注射をした跡をアルコールをしめした綿でかくく摩擦した。メリーもようやく自分が解放されたことを感じたらしく、私の顔を見上げて尾をはげしく振った。私は可憐かれんな気がして、メリーの頸を抱き

その額をなでた。人前ではあったが、私はそうせずにはいられなかった。

証明書を書くだんになって、獣医は私をかえりみて、

「名前は？」

「メリー。」

D

私の頬ほおには血がのぼり、私は自分の声音にメリーに対する自分の気持を確かめるような思いをさえ味わった。

家に帰って、私はメリーの小屋のわきにある柿の木にメリーを繋いだ。ことしは柿の当り年らしく、柿の木の梢こずえには、枝もたわわに実が成っている。この実が色づく頃には、メリーは子どもを産むのだと私は思った。

(注) 1 上框——家の上がり口にわたした横木の部分。

2 連合——配偶者。

3 焔炉——煮炊きができる小型の炉。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 11 13。

(ア) 他意はないのだ

- 11
- | | |
|---|-------------------------------------|
| ⑤ | ひとの気持ちを弄 <small>もてあそ</small> んでいるのだ |
| ④ | 欺 <small>あざむ</small> かれるつもりなどないのだ |
| ③ | 気をとられるようなことはないのだ |
| ② | 不満に思うような気持ちはないのだ |
| ① | 隠している気持ちなどないのだ |

(イ) 無聊を託って

- 12
- | | |
|---|--------------|
| ⑤ | 放置したまま何もしないで |
| ④ | 不平を並べ立てて |
| ③ | 手持ちぶさたを嘆いて |
| ② | 好き勝手にふるまって |
| ① | 退屈を紛らわして |

(ウ) 鷹揚

- 13
- | | |
|---|-------------|
| ⑤ | 思いがけない驚き |
| ④ | のんびりとしたやすらぎ |
| ③ | いきいきとした喜び |
| ② | ゆったりとした落ち着き |
| ① | 役立つことへの満足 |

問2 傍線部A「私はその犬を飼おうと思った」とあるが、そのときの心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① このたびの気まぐれはあまりにも軽はずみだったと自省する一方、これまでもそんなふうにして生きてきたのだという思いもあり、周囲が反対するようなことがあったとしてもやっていけるはずだと思っている。
- ② 犬を飼うことに対して自信があるわけではなかったが、自分の気持ち次第ではやっていけないこともないだろうと高を括（くく）る気持ちもあり、借りている離れの土間で飼うことを念頭に具体的な計画を思い描いている。
- ③ これまで人間との同居に失敗したこともあり犬を飼うことにはっきりした自信がもてないているが、保護者としての自覚をお互いが忘れなければ上手くいかないはずはないだろうと、犬を飼うことに前向きになっている。
- ④ 自分が借家住まいの身であることが気にならないわけではなかったが、犬を飼ったら楽しいだろうという考えにうかつかとのめり込んでしまい、しっかりした自信はもてないながらも犬と一緒に暮らす気持ちにいつしかなっている。
- ⑤ 自分の思いつきの軽率さを顧みないでもなかったが、犬を飼うという考えに多少とも夢中になっていたし見通しが立たないこともなかったので、たしか自信もないままその思いつきをいつも通り実行に移そうと思っている。

問3

傍線部B「私はほつとした。」とあるが、ここに至るまでの「私」と「お婆さん」とのやりとりの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 犬を飼おうという思いつきのままに行動した「私」と異なり、どこか世慣れたところのあるお婆さんは「私」が連れてきた犬が牝犬であることだけでなく仔もちであることまで見抜き、「私」に対して犬を飼う際の心構えを説くなどの気配りを見せた。

② お婆さんの了解を得ないまま犬を飼おうとしている「私」に対して、お婆さんは犬が仔もちであることを指摘し、好きでなければ飼えないということを遠回しに教えたが、最終的には「私」の犬への気持ちを理解し、快く飼うことを承知してくれた。

③ 「私」は自分で飼う気でいながら犬の性別すら確認していなかったが、犬を飼った経験のあるお婆さんは犬の性別だけでなく仔もちであることまで見抜き、その点を気にしてためらっていた「私」に、むしろ犬のためを思って飼うよう勧めさえした。

④ 「私」はお婆さんが犬を飼うことを許してくれるかどうか気になりはじめたが、犬の状態を知るにつけそれを面倒に感じたりもする「私」と異なり、お婆さんは犬に分別をもつて接しつつも変わらぬあたたかなまなざしを向け、犬を飼うことを許してくれた。

⑤ 犬を飼うことに心を奪われ平常心を欠いていた「私」と異なり、冷静なところのあるお婆さんは犬の来歴まで推測してみせたが、もともと動物が好きでその憐れな捨て犬を慈しむ気持ちが強かったこともあって、不承不承ではあったが飼うことを許可してくれた。

問4

傍線部C「メリーを見ると、そんな想像が湧いてくるのだ。」とあるが、なぜそんな想像が湧いてきたのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 「私」に無私の愛情を向けてくれるメリーは、他の動物とは違って、善良な庶民の心を持つがゆえに神のみもとにあることを許された存在なのだから、メリーが愛されるのは当然だと考えるようになったから。
- ② メリーの気持ちをつい忖度^{そんたく}してしまう「私」に対して、メリーが「私」の気持ちをくんでくれているかのようにふるまい和ませてくれることに感激し、そうしたメリーが愛情と無縁な存在ではなかったと思えるようになったから。
- ③ これまで誰からも愛されることがなかった「私」にとって、深い愛情と信頼を寄せてくれるメリーはかけがえのない存在であり、そのメリーと関わりのあった人のことも許すべきだという思いが湧いてきたから。
- ④ 前の飼い主のことを忘れてひたすら「私」に忠実な愛情を向けてくれるメリーを見ると、自分も前の飼い主のころなど気にかげず、目の前のメリーに心からの愛情を向けようと思えてきたから。
- ⑤ メリーの素直でかわいらしい様子を見ると、その良さが無邪気な子どもに可愛がられたことによるものだと納得でき、親の意向でメリーを手放さざるをえなかった子どもの切ない気持ちがわかるような気がしてきたから。

問5

傍線部D「私の頬には血がのぼり、私は自分の声音にメリーに対する自分の気持を確かめるような思いをさえ味わった。」とあるが、このときの「私」の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 人前ではじめてメリーという自分がつけた名前を告げることこころよくに昂揚しつつも、そうした自分の過剰とも言えるメリーへの思い入れが、他人にはどう理解されるか一抹の不安も感じている。
- ② はじめは飼おうという気になれなかった犬が、もういまは自分の分身のような存在になってしまっていることのうれしさと不思議さを感じつつ、メリーとの偶然の出会いからいままでの出来事を反芻はんすうしている。
- ③ 獣医の問いに対して、他ならぬ自分がつけた名前を告げることができるとに心の高ぶりを覚えつつ、自分にとってかけがえない存在であるメリーに対する自身の深い思いをかみしめている。
- ④ 診察を素直に受けたメリーのけなげな様子に感激さめやらぬなか、獣医に突然名前を問われたことに当惑する一方、誰憚はばかることなく、愛すべき名前を口にできる喜びも覚えている。
- ⑤ 気の置ける獣医に愛犬の名を告げること、照れくさく感じながらも、これから大切な時期を迎えるメリーのために獣医と協力しつつできることをやらなければならないかと思いを新たにしている。

問6 この文章における表現の特徴の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問

わない。解答番号は

18

・

19

。

- ① 8・9行目の「『私達はもう他人じゃありませんね。』と云っているように見えた」の部分では、「見えた」と表現することで、ここでの「私」の思いがひとりよがりのものではなく、客観性をもつものであることが示されている。
- ② 43行目の「私は犬をメリーという名で呼ぶことにした」以降から犬は一貫してメリーと呼ばれているが、そこからは、自分が飼い主であることを誇示するとともにメリーに恭順であることを求める「私」の変貌を読み取ることができる。
- ③ 43行目の「メリーは、お婆さんの云うように、たいした犬ではない」という表現は、メリーへのお婆さんの辛辣な言葉^{しんろう}を悲しく思う「私」が、それゆえにいつそうメリーに愛情を傾けていくことを暗示するという効果をもっている。
- ④ 58～61行目の「」で括られた部分では、世間的なつきあいが苦手な「私」の孤独が浮き彫りにされているが、そうした「私」のありようが、偶然出会って飼うことになった犬との関係に溺れていく「私」の心理的背景ともなっている。
- ⑤ 93行目「獣医はいい眼つきで私を眺め、破顔一笑した」という表現は、信頼に値すると思える獣医が、飼い犬を案じる「私」に対して好感を抱いているだろうことを「私」自身が感じていることが示されている。
- ⑥ 103・104行目の「枝もたわなに実が成っている。この実が色づく頃には、メリーは仔どもを産む」という表現からは、生命の豊饒^{ほうじょう}さは自然との相即的な関わりの中で育まれていくものだという、日本古来の自然観を読み取ることができる。

第3問

次の文章は、江戸時代の紀行『伊香保の道ゆきぶり』の一節である。作者の油谷倭文字は大勢で伊香保（現在の群馬県にある温泉地）へ旅をしたが、その帰りに泊まった宿で、その宿の娘と交わしたやりとりについて記している。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

佐野(注1)のなにがしが家居(いへ)とや、しげき木(こ)の間に深(ふか)う見ゆ。(注2)岩舟出(いわふね)づるなどいふ尊(うやうや)き寺(てら)を拝(をが)みめぐりて、夕(ゆふ)つかたに宿(やど)とりぬ。げによき莖(くた)立(た)ちなど調(てう)じたるを、「菜(な)はあれど今(いま)一つ(ひとつ)の物のありげにもあらざめり」など言(い)ひて、男(おとこ)どち(どち)は笑(わら)ふを、「あなかま、耳(みみ)なし山(やま)かは」など言(い)ふ人もあり。(注3)この家の刀(やと)自(じ)はこのごろ旅立(りょだち)ちて、娘(むすめ)なる人(ひと)ぞさかし人(ひと)なりける。(注4)かたはらに古(ふる)びたる草子(くさこ)ひき散(ち)らしてあるを、つれづれなるままに取りて見(み)るたるに、「いかにをかしき御心(ごこころ)ばへもあらんと思(おも)う給(たま)へらるるを、書き破(や)り給(たま)ふらん御手習(ごてしう)ひを見聞(みきこ)こえばや」など、小(こ)さき男(おとこ)の童(わらわ)して言(い)ひ出(で)だせるを聞(きこ)くに、か(か)の酒欲(しよほ)しみたる男(おとこ)、にはかに口(くち)ふさぎなどするもをかしかりき。さるは、誰(たれ)が言(い)ふならんとおぼつかなくて、「鄙(ひな)の長路(ながぢ)のやつれに、さるべき心(こころ)ばへども、袂(たもと)の下(くだ)りとともに迷(まよ)ひはててな(な)ん侍(はべ)る。御もとにこそおはさめ。旅(りょ)の心(こころ)もなぐさめ(せ)んに、こよなかるべし。(注5)X 小(こ)さき紙(かみ)に書(か)きたるを持(も)たり。見(み)れば、雨(あめ)のうちにほととぎすを聞(きこ)くてふ題(だい)にて、ど答(こた)へやりつれば、しばらくありて同じ童(わらわ)、小(こ)さき紙(かみ)に書(か)きたるを持(も)たり。見(み)れば、雨(あめ)のうちにほととぎすを聞(きこ)くてふ題(だい)にて、

A 五月雨(さみだれ)はこととふ人もあらざるにつれなく過(す)ぐる山(やま)ほととぎすまた恋(こひ)とて、

B 思(おも)ひきや霜夜(しもよ)の床(とこ)にまつ虫(むし)の音(おと)をのみなきて帰(かへ)るべしとは

となん。「この松虫(まatsuむし)は、きりぎりすをふと書(か)きそこなへるにもや」などいふ人もあり。とまれ、かく情(なさけ)けありげなる人(ひと)ありけりと、あやしうて問(と)へば、この童(わらわ)のはらからなりけり。思(おも)ひかけず、人(ひと)ゆかしうおぼえて見(み)やりたるに、いたくきたなげなるものを着(き)て、何(なん)にかあら(c)ん、かの姉(あね)とささめいて往(い)にたるは、「夫(そな)なり」と言(い)ふに、見(み)驚(おどろ)くばかり似(に)げなくぞ待(まち)るは、いかなりけることにか。さるべき人の時失(うしな)へるならんと思(おも)ふに、悲(かな)しうさへおぼえられて、ゆくりなき道行(みちゆき)き人(ひと)といへど、一夜(いちや)の宿(やど)もさ

るべきにこそと思へば、**Y**とひなぐさめばやなど思ふものから、道のつらに心屈しにたれば、かひなくて静まりぬ。

つとめて急ぎ立つにも、よに名残多くて、「**(イ)**またこそたづね聞こえなん世もあらめ。かしこへも立ち出で給へかし。何てふ所たづねて、必ず宿り給へよ」など言ひて別れつるが、人して言はせつ。

C この宿に心はとめつほととぎすつれなく過ぐと思はざらな**d}**ん

とて、行く行く、なほいかなるにか、かくまでは思ふらんとあやし。

道のつらの小田をだどもに、蛙かはづの声々鳴くも、何となくあはれに聞きなざるを、「こは雨を呼ぶなり」など、供なる人の言ふを聞くには憎くなりぬ。やがて降り来れば、「さればよ」と言ふ。「**(ウ)**何のたけきわざかは。よき祥言さか言ひ合はせたらんをりは、いかにばかりほこりかならまし」など、人々苦しきものから笑ふ。

(注) 1 佐野——現在の栃木県佐野市。

2 岩舟出づるなどいふ尊き寺——栃木県岩舟町にある高勝寺のこと。弘誓坊明願こうせぼうみょうがんという僧が、この地にある岩舟山で生身しんごじんの地藏菩薩じざいぼさつと出会い、開山したという伝承がある。

3 茎立ち——スズナやアブラナなどの野菜。

4 今一つの物——ここでは、「菜」に対して、酒のことをいう。

5 男どち——作者の供をしている男たちのこと。

6 耳なし山——現在の奈良県橿原市にある耳成山みみなし。「耳無し」を掛ける。

7 この家の刀自——この宿の女あるじ。

8 酒欲しみたる——酒を欲しがった。

9 袂の下りとともに——「迷ひ」を導く言葉。『風の音との遠き我妹わがもが着せし衣袂きぬの下りまよひきにけり』(『万葉集』巻十四・雑歌)による。

10 きりぎりすをふと書きそこなへる——「きりぎりす鳴くや霜夜しもよのさむしろに衣片ころも敷きひとりかも寝む」(『新古今和歌集』秋・藤原良経)を踏まえた発言。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20

22

(ア) 誰が言ふならんとおぼつかなくて

20

- ① 誰のために言うのだろうかと不審で
- ② 誰が言ったのかと心配で
- ③ 誰が言うのだろうかと気になって
- ④ 誰のことを言っているのかわからなくて
- ⑤ 誰が言い出したのか滑稽で

(イ) またこそたづね聞こえなん世もあらめ

21

- ① またいつかおいでになる時もあるでしょう
- ② 再び訪問し申し上げる機会もきつとあるだろう
- ③ もう一度お聞きしたいことがあるのです
- ④ 改めて手紙を出すのがよいに違い
- ⑤ ほかに申し上げたいことも残っています

(ウ) 何のたけきわざかは

22

- ① どれほどのすばらしいことであろうか
- ② どんなに驚くことだろうか
- ③ どうして威張らないのだろうか
- ④ 何ともすぐれたことではあるなあ
- ⑤ 何の問題もありはしない

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

23。

①	a	係助詞の一部	b	意志の助動詞	c	推量の助動詞	d	係助詞の一部
②	a	係助詞の一部	b	仮定・婉曲の助動詞	c	推量の助動詞	d	終助詞の一部
③	a	係助詞の一部	b	仮定・婉曲の助動詞	c	現在推量の助動詞の一部	d	係助詞の一部
④	a	終助詞の一部	b	仮定・婉曲の助動詞	c	現在推量の助動詞の一部	d	終助詞の一部
⑤	a	終助詞の一部	b	意志の助動詞	c	現在推量の助動詞の一部	d	係助詞の一部

問3

傍線部X「かたはしをだに」とあるが、これは誰がどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- ① 宿の娘が、都から遠く離れた所に住んでいて和歌に触れる機会もないが、以前から詠んでみたかったので、手本にするために一、二首でもよいから和歌を詠んでほしい、と言おうとしている。
- ② 宿の娘が、古い草子を手にとって読んでいる作者を見て、作者に風流を好む心があることを知り、自分も古典に興味があるので、少しでよいから古典について語り合いたい、と言おうとしている。
- ③ 作者が、疲れ切ってしまった同行者たちもいて彼らの世話をしなくてはいけないので、和歌や古典など優雅な方面の話は、残念だがほんの少しもできないだろう、と言おうとしている。
- ④ 作者が、長旅の疲れで風情を楽しむ心の余裕はあまりないが、ここで和歌を詠むのも気分が変わってよいかもしれないから、一、二首だけでも詠んでみよう、と言おうとしている。
- ⑤ 作者が、そちらにこそ趣深い和歌はあるだろうし、旅に疲れた自分の心を取りわけ楽しませてくれるだろうから、少しでもそれを見せてほしい、と言おうとしている。

問4

傍線部Y「とひなぐさめばや」とあるが、このときの作者の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① たまたま宿に泊まった客の立場で、宿の娘の身の上にまで踏みこんだ話することへの躊躇^{ちゆうちよ}はあるが、自分と同じようにつらい境遇にある宿の娘との出会いを、前世からの因縁と捉え、互いに語り合い慰め合おう、という思い。
- ② 教養のある宿の娘とはあまりにも似つかわしくない夫の姿を見ると、その夫とともに暮らしている娘のことが気の毒に思われ、この家に泊まったのも前世からの因縁だろうから、娘から話を聞いて慰めてあげたい、という思い。
- ③ 宿の娘とは不釣り合いな、ひどく粗末な身なりをした夫の存在を知って、娘に同情したが、宿泊客である自分が軽はずみに口出しすべきことでもないで、残念だけれど娘の悲しみを慰めてあげられない、という思い。
- ④ 宿の娘が無風流な生活を嫌い、趣深い会話ができるような話し相手もないことを嘆いているのを知って、それならば娘を自分の家に招き、知り合いを紹介することで、娘を慰めてあげることができるだろう、という思い。
- ⑤ 風流なやりとりをした宿の娘が、予想に反してひどくみすばらしい姿をしていることに驚き、その境遇は前世からの因縁であろうと思うものの、やはり悲しく感じられて、せめて話だけでも聞いて娘を慰めたいものだ、という思い。

問5

AとCの和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① Aは、自分を「五月雨」に、恋人を「山ほととぎす」になぞらえることによって、恋人の訪れが途絶えた宿で、涙を流して悲しんでいる心情を表している。
- ② Bは、私が寒い夜に泣きながら一人で寝るのに、あなたは松虫のように声を聞かせるだけで逢わずに帰っていくとは思わなかったと、つれない相手を恨む内容となっている。
- ③ Bは、「まつ虫」の「まつ」に「待つ」を掛け、待つてはみたものの、やはり予想通りに恋人は来ないので、松虫が鳴くように声をあげて泣き悲しむという心情が詠まれている。
- ④ Cは、二句切れと倒置法を用いることによって、ほととぎすだけではなく、訪れた人までもこの家を通り過ぎてしまった悲しみを強調するものとなっている。
- ⑤ Cは、宿の娘が詠んだAの歌を踏まえて、「ほととぎす」に作者自身が投影され、宿の娘を心にかけて旅立つ名残惜しさが詠まれている。

問6 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① 文章全体を通して、各地の名所の風光明媚な様子や土地の人との交流が綴られており、「耳なし山かは」「こは雨を呼ぶなり」など、同行の人々の笑いを誘う発言がそれぞれの場面に配置されることで、作者一行の、苦しい中にも和氣藹々とした旅の様子がいきいきと描かれている。

② 母亡きあと宿を一人で切り盛りしている娘についての、「さかし人なりける」「情けありげなる人ありけり」といった描写や、古歌の「きりぎりす」をわざわざ「まつ虫」に入れ替えて詠むような、王朝人を彷彿とさせる人物設定によって、この文章に物語的な効果もたらされている。

③ 佐野で宿をとったときのできごとが、人々の会話を中心に具体的に述べられる中で、「あやしうて」「人ゆかしうおぼえて」「悲しうさへおぼえられて」など、作者の心情も丁寧に描写されており、旅の途中の偶然の出会いに作者自身も不思議に思うほど深く感慨を催したことが示されている。

④ 紀行文ではあるが、単なる見聞の叙述にとどまらず、「茎立ち」「よき祥」といった『万葉集』に見られる古い語句が用いられたり、「袂の下り」など古歌の一部が引用されることで、古典にあこがれ、江戸に出て本格的に古典を勉強したいとまで思っている宿の娘の人柄が印象的に表されている。

⑤ 作者が佐野の宿に滞在していた間に詠んだ三首の和歌を軸にして、作者と宿の娘との交流が語られているが、二人のやりとりには「宿」「つれなく」などの、男女の恋の贈答歌によく見られる優美な表現が多用されており、本文全体があたかも歌物語を思わせるような構成になっている。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

（配点 50）

貧賤^ハ不^レ如^カ富貴^ニ耶^カ。抑富貴^ハ不^レ如^カ貧賤^ニ耶^カ。人莫^シ急^{ナルハ}於^ニ温飽^{ヨリ}。靡衣^{ビイ}華飾^ハ。

固^{モトヨリ}美矣^{ナリ}。然^{レドモ}補破^{注2}遮^モ寒^ヲ、其^ノ為^{スハ}温則^チ一也。甘味^{注3}盛饌^{センモ}亦佳矣^{ヨシ}。然^{レドモ}糲食^{注4}。

充^{ミタセバ}饑^{ウゑラ}、其^ノ為^{スハ}飽則^チ一也。温飽之余^ニ、何必^ニ羨富貴^一哉。

彼委積^{注5}愈厚^{ニシテ}、鞭算^{注6}愈切^{ニシテ}、鬚鬢^{注7}愈白^{ケレバ}、計慮^シ愈深^ニ。第宅田園、器用服飾、

曷^{なんゾ}嘗^テ見^{ンヤ}其厭足^{注8}。為^ニ子計^リ、又^タ為^ニ孫計^リ、惟恐^ダ其不^ル克^{ツガ}紹^一。日間^ハ飲膳^{注8}失^ヒ期^ニ会^ヲ、

夜亦^モ不^レ能^ハ甘寝^{スル}。貧賤^ノ者不^ル如^キ是^ノ之^ノ勞苦^{アラ}也。

肥甘^{注9}沈湎^{注10}、乃^チ致^ス疾^ヲ之^ノ媒^{ナリ}。粉白^{注10}黛綠^{注10}、皆喪^{ほろぼ}身^ヲ之^ノ具^{ナリ}。動^{スレバ}由^ニ順境^一、難^ク

禁^ジ摧挫^{注11}、少^{シク}不^レ如^レ意^ノ、或^{イハ}飲^ミ氣^ヲ嘔^{ハキテ}血^ヲ而暴^ズ亡^一。素^{もとヨリ}处^{注12}參養^ニ、不^レ耐^ヘ風霜^ニ、稍^{やや}

有^{レバ}感^{注13}触、雖良薬有所不能療。貧賤^ハ者^ル不^レ如^ク是^ノ之脆弱^{ぜいじやくアラ}也。

(李^り之彦^{しげん}『東谷所見^{とうくしよけん}』による)

(注)

- 1 靡衣——豪華な服。
- 2 補破——継ぎはぎだらけの服。
- 3 盛饌——ごちそう。
- 4 糲食——粗末な食べ物。
- 5 委積——貯え。
- 6 鞭算——懸命に数える。
- 7 鬚鬢——あごひげと耳ぎわの髪の毛。
- 8 失^ニ期会——時間どおりにならない。
- 9 肥甘沈湎——美食や酒におぼれること。
- 10 粉白黛緑——^{おしろい まゆずみ}白粉と眉墨。ここでは美しい女性のこと。
- 11 摧挫——我が身を害^{そこな}う。
- 12 処^ニ参養——ぬくぬくと養われている。
- 13 有^ニ感触——外からの刺激を受ける。

問1 傍線部(1)「由順境」・(2)「暴」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ・ 29。

(1)

「由順境」

28

- ① 穏やかな心境になって
- ② 恵まれた境遇にあるため
- ③ 定められた境界であるので
- ④ 整備された環境にいるため
- ⑤ 悟りの境地に達していて

(2)

「暴」

29

- ① 偶然に
- ② 自然に
- ③ 苦悩して
- ④ 突然に
- ⑤ 絶望して

問2

傍線部A「人莫_レ急_ニ於_ニ温飽_一」・傍線部C「第宅田園、器用服飾、曷嘗見_ニ其厭足_一」の解釈として最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

30

・

31

A 「人莫_レ急_ニ於_ニ温飽_一」

30

- ① 人にとっては、寒さと飢えをしのぐこと以上に切実な望みはない。
- ② 人は、寒さや飢えのせいで生き方を変えることなどありえない。
- ③ 人にとっては、暖かい着物を着て腹一杯食べる必要不可欠である。
- ④ 人が、暖かい着物と美味しい食べ物を欲しがるのは当然のことである。
- ⑤ 人は、生きている限り寒さや飢えから逃れることなどできない。

C 「第宅田園、器用服飾、曷嘗見_ニ其厭足_一」

31

- ① 家屋敷と田畑、道具や衣服装飾などは、自分で必要とする以上に手に入れてはならない。
- ② 家屋敷と田畑、道具や衣服装飾などは、どれほど手に入れてもいつかは要らなくなる。
- ③ 家屋敷と田畑、道具や衣服装飾などは、多くあればあるほど豊かな気分になれるだろう。
- ④ 家屋敷と田畑、道具や衣服装飾などは、多くあったからといって邪魔になるものではない。
- ⑤ 家屋敷と田畑、道具や衣服装飾などは、もうこれ以上必要ないなどということはない。

問3

傍線部B「何必羨富貴哉」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 32。

- ① 何をか必ず富貴を羨むや
- ② 何ぞ必ずしも富貴を羨むや
- ③ 何ぞ必ずしも富貴を羨まんや
- ④ 何をか必ず富貴を羨まんや
- ⑤ 何ぞ必ず富貴を羨むかな

問4 傍線部D「貧賤者不如是之劳苦也」とあるが、「貧賤者」についての説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 「貧賤者」は、貧しいために日々の生活に追われ、財産を築く余裕はまったくないということ。
- ② 「貧賤者」は、清貧な生活を理想としているので、財産を築くことに関心がないということ。
- ③ 「貧賤者」には、子孫に残す財産がないので、財産について悩む必要がないということ。
- ④ 「貧賤者」には、財産への執着心が人一倍あるものの、財産を獲得する手段を持たないということ。
- ⑤ 「貧賤者」が貧しいのは、日々の生活の満足を求め、儉約を心がけないからであるということ。

問5

傍線部E「肥甘沈湎、乃致疾之媒」とあるが、「肥甘沈湎」についての説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 「肥甘沈湎」は人から妬ねたまれる要因になる。
- ② 「肥甘沈湎」は憎しみを忘れさせるものである。
- ③ 「肥甘沈湎」は病気を引き起こすものになる。
- ④ 「肥甘沈湎」は悩みを解消する手だてである。
- ⑤ 「肥甘沈湎」は悪習を広める原因となる。

問6 傍線部F「雖良薬有所不能療」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

① 雖良薬有所不能療_一

良薬の有る所と雖も^{いへど}能く療^いさず

② 雖良薬有所不能_レ療

良薬の有る所と雖も療_レす能^{あた}はず

③ 雖良薬有所不能_レ療

良薬有りと雖も療_レす能はざる所なり

④ 雖良薬有所不能_レ療

良薬と雖も有れば療_レす能はざる所なり

⑤ 雖良薬有所不能_レ療

良薬と雖も療_レす能はざる所有り

問7

本文の内容と構成の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

36。

① 「貧賤」も「富貴」も相対的なものでしかないと最初に述べて、「富貴」には「富貴」なりの、「貧賤」には「貧賤」なりの苦勞があり、はつきりとは優劣をつけがたいと結論づけている。

② 「貧賤」も「富貴」も当人の受け取り方次第であると最初に述べ、「富貴」であつても不幸な人々、「貧賤」であつても幸福な人々を具体例として挙げ、人の心の持ち様の大切さを訴えている。

③ 「貧賤」と「富貴」というあり方を健康という視点から対比的に検討し、衣食などの具体例を提示しつつ、「富貴」が「貧賤」に勝るといふ常識がいかに正しいかを証明しようとしている。

④ 人にとって「貧賤」が「富貴」よりもましであるという結論を最初に述べ、その理由として「富貴」の人々の向き合わなければならない危険性を挙げ、次いで「貧賤」な生活の安全性を強調している。

⑤ 人が生きるうえで「貧賤」と「富貴」とどちらがよいのかという問題を、衣食を例に挙げて提起し、「富貴」にあることの危うさを具体的に述べ、結果的に「貧賤」の方がよいと示唆している。

